津島の歴史・祭礼　概要

1　津島の歴史

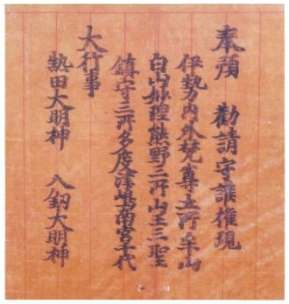
弥生時代以前の海部津島は海の中と思われていましたが、津島市内の寺野遺跡（てらのいせき）などから、弥生時代の 2000 年前頃から人の住んでいたことがわかりました。寺野遺跡の出土品には、弥生中・後期の各種土器・パレススタイルの丹彩土器などがありました。また土錘も出土し、寺野地域が半農半漁の集落であったことがわかりました。

寺野廃寺跡からは、白鳳期の軒丸瓦（のきまるがわら）も出土しました。これにより、古代白鳳時代に大伽藍（だいがらん）があったことがわかりました。

橿原考古学研究所が 2001 年度に行った「飛鳥京跡苑池遺構第４次調査」で、飛鳥時代堆積層から木簡（もっかん）が２３点出土しました。木簡の中に、「戊寅年十二月尾張海評津嶋五十戸」と墨書されたものがありました。津島の歴史を考える上で貴重な木簡です。津島の初見は 500 年も遡り、大化の改新（645 年）・壬申の乱（672 年）を経て、古代国家が成立した天武７年（678）に、「津嶋五十戸（つしまのさと）」が存在し、1,000 人ほどの人々が居住していたことがわかりました。

平安時代の律令制の細かい規則をまとめた『延喜式（えんぎしき）』の「諸国駅伝馬条」には、「尾張国駅馬　馬津・新溝・両村各十匹　伝馬　海部郡・愛智郡各五匹」と記されています。「駅」とは、律令制度の中で公用の旅行や通信のために、それらを運ぶ馬や船や人夫を置いた施設のことです。９世紀の尾張国海部郡に馬津駅（うまづえき）があり、馬津駅は伊勢国とつなぐ尾張の湊でした。この馬津駅は現在の津島北部周辺にあったとする説が有力です。

『延喜式』の「神名帳」には、尾張国海部郡の式内社８社が記されています。その一つが神守の憶感神社です。津島神社は式内社とされていません。祇園社（八坂神社）も式外社です。



平安時代の史料で「津嶋」と書かれているものは、七寺（名古屋市中区）が所蔵している国宝『一切経（いっさいきょう）』巻末です。承安５年（1175）に書き写された大般若経の奥書（最後の頁に書かれた文書）に「津嶋社」と記されています。「津嶋社」も尾張有数の大社であったことがわかります。

鎌倉時代の津島に関わる史料は数少ないですが、鎌倉時代に成立した歴史書『吾妻鏡（あづまかがみ）』巻８の文治４年（1188）の条には、津島社の荘園領主である修理大夫に収められるべき物品を板垣冠者（地頭）が横領していることを訴える記事があります。

鎌倉時代の東海道紀行文『海道記（かいどうき）』の作者は、京都から伊勢路を通り、木曽川を渡って尾張に着いています。『海道記』の貞応２年（1223）４月７日の記録には、「津島の渡り」について記しています。この『海道記』の記述から、１３世紀前半の津島は「渡り（湊）」でしたが、桑畑のある農家が点々と建っていた農村でした。すなわち、水際に出来た船の停泊所しかなく、宿や市があった萱津（現、甚目寺町）や熱田（名古屋市熱田区）への単なる通過点であったと思われ、中世都市としては未発達だったと考えられます。

津島は、１４世紀後半頃（南北朝時代末）には中世都市（湊町）になっていました。中世の湊町には、多くの物資を長距離にわたって運ぶことが出来る交通手段である船が停泊できる「湊」の機能、積み込んでいた物資をその場で販売し、必要な物を購入する「市」の機能、内陸部の

地域を結ぶ陸上交通と海上や河川交通との接点として物資を積み降ろし中継する「問（とい）」の機能、その乗組員らが宿泊できる「宿（しゅく）」の機能が必要でした。

津島社も大きく発展しました。それは、津島社が牛頭天王（ごずてんのう）を祭神とする神社だったためです。中世においては、疫病の流行は最も恐れられたものでした。疫病退散の神社は、京都の祇園社以東では、津島社が最も有名でしたので、村々では津島社を勧請して分霊社（ぶんれいしゃ）を建立し、村に疫病が流行しないことを祈願しました。現在、全国に分霊社・末社は 3000 社あるといわれています。

伝染病の多くは夏に発生します。夏の酷暑を無事に過ごすことを祈願するために、牛頭天王を祀る神社では天王祭・祇園祭などの夏の祭礼が行われるようになりました。

京都の祇園社（八坂神社）の祇園祭のように、都市部では山鉾や出車・屋台を華麗に飾り、行列や歌舞をともなう風流が行われ、華美を競いあいました。

津島でも華麗な尾張津島天王祭が行われるようになったことから、町衆の経済力が京と同じくらいに豊かであったことがわかります。一方、農村部では疫病を防ぐためと病害虫をおさえるための祭り（虫送り行事など）になりました。

祇園祭と津島天王祭は、日本の各地で行われている夏祭様式に大きな影響を及ぼしたといえます。尾張津島天王祭は「津島のお天王さま」とも呼ばれた津島牛頭天王社の祭礼であり、陰暦６月１４・１５日の両日（現在は７月第４土、日曜日）に行われていました。

１４世紀後期、津島が中世都市の発展する段階で鎌倉仏教各宗派の中核となる寺院の進出が始まり、１５・１６世紀に多くの寺院が建立されています。津島は寺院が多いことで有名でした。「津島三十六坊」と呼ばれ、わずか１ｋｍの街道沿いに３６もの寺院があり、臨済宗を除くすべての宗派の寺院があります。

１５世紀中期、中世都市として発展した津島において、津島牛頭天王社の神官（社家）、四家七名字らの地侍・上層農民（富農）であった人々が、経済の発展とともに１６世紀の戦国期に、大地主・酒屋・武器商人・土倉（金融業）あるいは廻船業者・馬借（運輸業）という富裕層となり、自治組織「惣（そう）」を構成し、「津島五ヶ村」の政治経済を支えていたと考えられます。

「津島五ヶ村」が初めて文書としてあらわれるのは、天文９年（1540）１２月、織田信秀が津島五ヶ村宛てに出した文書です。津島五ヶ村とは、米之座・堤下・今市場・筏場・下構のことですが、それぞれが独立していたわけではなく、惣・自治組織としてはまとまっていました。

戦国時代の津島は、現代に至る歴史の中で最も華やかな時代であったかもしれません。政治、経済、人材育成、文化などの面で素晴らしい成果があり、商業都市津島の基盤はこの時代に築かれたといえます。文化面で特筆されるのが、尾張津島天王祭です。

織田信長の祖父 織田信定は、勝幡（愛西市佐織地区）に城を構えました。勝幡は津島にも近く、中島郡・海東郡・海西郡の境に位置していたため、軍事上の拠点として着目したためと考えられます。大永

年間（1521～1528） に信定は、経済的に発展していた津島を支配するようになりました。

信定の嫡男 織田信秀の勢力範囲は、尾張下四郡であり、その中で経済的に発展していた中世都市が津島でした。信秀が尾張で勢力を伸長することができたのは、商品流通経済が発展した津島を掌握し、その富を利用することで力をつけることができたためです。津島の財力を背景として、信秀は熱田湊・那古野・古渡・末盛と勢力を伸ばしていきました。

連歌師の宗長（1448～1532）は、大永６年（1526） ３月の『宗長手記（そうちょうしゅき）』で「同じ尾張国の津島へ到着した。…堤に沿って建ち並んでいる家々が川岸に群生している葦の間から見える。この津島の地は、堤の上に家並みがある。川には、長さ約三町の橋（天王橋）がかかっている。瀬田の長橋より随分長い。及川・墨俣川（古木曽川）が合流しているので、近江の琵琶湖のようである」 と記しています。

この『宗長手記』と鎌倉時代の『海道記』の記述内容を比較してみると、300 年の間に、津島の風景は「村」から「町」へと大きく変貌していることがわかります。

織田信長は、天文２０年（1551）に父 信秀が没したため、家督を継承しました。『信長公記』には、信長が津島で踊りをした記事があります。

『七月十八日、信長公は天人の衣装で、小鼓を打ち、女踊りをされた。津島では堀田道空のお屋敷の庭でひと踊りされ、それから清須へお帰りになった。津島五ヶ村の年寄たちがおどりのお返しをしに、清須へやってきました。信長公は、年寄たちを御前へお召しになって、「これはひょうきんだ」とか「よく似ている」などと、それぞれ親しく、気安くいちいちお言葉をおかけになり、もったいなくもご自身で年寄たちを団扇であおがれ、お茶を「飲まれよ」とすすめられた。… 』（現代訳）

この頃、信長は尾張統一のために織田一族と戦っている最中でした。この記述から、信長にとって津島は安心できる地であり、また津島五ヶ村の持つ経済力を頼りにしている側面があったことがわかります。 また、津島で「御葭踊（みよしおどり）」「津島踊」と称される風流踊（ふりゅうおどり）が隆盛していたことが分かります。

尾張の玄関口であった津島は金銀、物資の流入のみならず、京文化もいち早く流入していたのです。

津島四家七名字（つしましけしちみょうじ）と称された大橋・岡本・山川・恒川・堀田・平野・服部・真野・鈴木・河村・光賀と宇佐美・開田・野々村・宇都宮の津島１５家は津島衆とよばれ、織田信秀・信長によく仕え、各地の合戦で活躍したことが『信長公記』などに記されています。

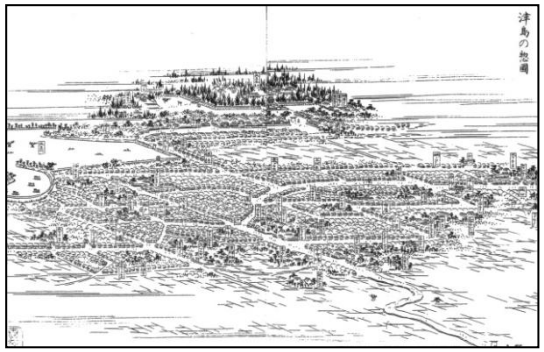
尾張で台頭してきた織田氏は、経済的に富み、湊の機能を有していた津島を勢力下に治めました。そして、津島に住む四家七名字に代表される有力者らは織田氏の家来になりました。 津島の堀田家の系統で、江戸時代に大名になったのは下総佐倉藩主 堀田正盛です。

徳川政権は、城下町をはじめとする主要な少数の都市だけを「町」として認め、中世以降商工業の発展にともない、列島の海辺、川や山などの交通の要衝、市場、さらに寺社の周辺にきわめて多数成立した大小の都市の多くを制度的には「村」としました。

津島は行政的には「村」でしたが、農村ではなく「村」とよばれた商業都市でした。

『尾張徇行記（おわりじゅんこうき）』（文政５年（1822）成立）には、「こ

の村は元より富裕な地で、工商業に従事している。土地を持つ高持の家は 707 戸、土地を持たない無高の家が 725 戸ある。このうち農商を兼ねている富裕の人々は土地を多く持ち、また工商業に従事している人々はその多くが土地を持たない」（現代語訳）と記されています。



また『尾張名所図会（おわりめいしょずえ）』（天保１２年（1841）成立）には、「古名を藤浪里ということは諸書に見える。今は津島という。尾西第一の大村であり、縦横の町並みは５０余街もあり、商家や農工業が軒を並べ、万物一として足らないことはない。さらに美濃路・伊勢路への舟行があるので、毎日、多くの人々の往来があり、諸国の旅客はこの津島に集まり、大変に繁盛している。まさに都会である」（現代語訳）と記されています。

このように近世の津島村は農村ではなく、湊町そして津島牛頭天王社の門前町というふたつの特徴を持った商業都市でした。

室町時代に芽生えた民衆の文化は、１７世紀の末から１８世紀の初めにかけて、上方（京都・大阪）を中心に豊かな町民文化として花開きました。その文化をその頃の年号をとって元禄文化といいます。この頃、尾張津島天王祭も一層洗練され、華麗な祭礼になりました。江戸時代中期に創始された、秋の山車祭も尾西地方の大祭になっています。

「茶の湯」文化も、江戸時代に町人文化としても根づきました。 津島でも富商らが頻繁に茶会を催していた事が、旧家に伝わる古文書からうかがえます。「茶の湯」の文化は、現在の津島にある町屋にも残っています。津島にある町屋の大きな特徴は、町屋内部に茶室があることで、家によっては、複数の茶室を持っています。この特徴は、町屋文化・建築様式として全国的にみても独特なものです。今も海部・津島地方には日常生活の中でも抹茶を楽しむ風習が残っており、多くの家は茶道具を持っています。

明治新政府による様々な新政策の中で、津島に大きな影響を及ぼしたのは町村大合併と、宗教面で従来の神仏習合が改められ、神仏分離令が出されたことです。明治２年（1869）、津島牛頭天王社は津島神社と改称しました。牛頭天王は仏教系の神とみなされたからです。

明治２２年（1889）に町政施行により、津島村・向島村・中地村と旧日光新田村分で海東郡津島町となりました。神守地域では、神守村・百高村・益和村・越治村・野間村の５村が誕生しました。神島田地域では、唐臼村・鹿伏兎村・半右衛門新田・頭長村・中一色村が合併して神島田村になりました。さらに、明治３９年７月１日に神守・百高・益和・越治・野間の５ケ村が合併し、神守村となりました。また、神島田村と大井村、千秋村の３ケ村が合同し、永和村が誕生しました。

津島町では明治２５年３月に電信開通、同２６年５月に㈱津島銀行が創業、同年１２月に㈱海島銀行も開業して金融取引機関が整備されました。明治２７年３月には津島紡績㈱、同２８年２月には日光川倉庫㈱、同年に津島木綿縞取引所が設立され、明治２９年３月には尾張製糸㈱が創立されました。

明治３１年４月に尾西鉄道㈱が弥富－津島間の営業を蒸気機関車で開始しました。その後、津島－森上、森上－萩原に続き、明治３３年１月に萩原－一宮（２５．

１ｋｍ）が開通し、弥富－津島－一宮が全線開通しました。

大正３年（1914）１月には、名古屋電気鉄道が枇杷島と津島を結ぶ津島線を開通させます。大正１４年に尾西鉄道㈱は名古屋電気鉄道に事業譲渡しました。

津島町の最大の道路工事が天王通り（天王線）の開通でした。昭和５年（1930）３月に全線開通しました。『津島町史』には「津島駅より津島神社前まで一直線に坦々たる大道を通じ、当町の第一等道路となった」と記されています。この天王通りには続々と商店が進出し、津島随一の商店街となり大変に賑わいました。

明治１７年（1884）の尾張の綿織物の生産量は大阪に次いで全国２位に位置していました。しかし、明治２４年（1891）１０月２８日の濃尾大震災により、綿花栽培も困難になり、建物・機具などことごとくを損傷してしまいました。この復旧には新規開業と同じような費用と労力が要りました。一方で安価なインド綿花の輸入が始まり、大企業が機械紡績によって安い綿布を大量生産し、市場進出しました。これには農家の副業では対抗できなくなり、尾西地方の綿織物業は次第に衰微しました。

「なにか綿織物にかわるものを…」、その模索の中で時代の流れをいち早く読んで毛織物工業へ着目した人物が津島の片岡春吉です。片岡春吉は片岡式織機を創りあげました。さらに、染色・整理加工についても創意工夫し、輸入品に劣らない高品質の毛織物を作りました。

片岡春吉が時代を先取りした毛織物産業は津島の主産業となり発展の原動力となります。日露戦争（1904 年）の軍用服地の需要に応じて、生産量が増加しました。次いで、大正３年（1914）に第１次世界大戦が勃発し、毛織物輸入は全く途絶えます。国産品が愛用され、尾張地方がセルの特産地として名声を博しました。この頃は「時計の振り子がひと振りするごとに１０円儲かる（現在の１万円位）」ほどの好況でした。片岡毛織の工場にも動力織機が導入されるとともに、撚糸や染色整理についても近代化が進み、この地方は毛織物産業地帯として急速に発展します。

第２次世界大戦後の衣料不足もあって毛織物産業は立ち直り、「ガチャ万」という言葉が生まれるほどの全盛期を迎えます。とくに 1950 年頃が最盛期でした。津島の各工場に全国各地から若い女性がたくさん集団就職するなど、活気にあふれ「ウールの津島」としてその名を全国に知られるようになりました。

毛織物産業が隆盛していた時代、尾張津島天王祭の次々と打ち上げられる大輪の花火は尾張の夏の風物詩でした。東京駅にも尾張津島天王祭のポスターが貼られていました。

しかし、毛織物産業は、昭和３０年代から衰退し始めます。昭和３４年（1959）の伊勢湾台風、２度の石油危機、昭和６０年（1985）のプラザ合意後の円高ドル安まではなんとか乗り切ったものの、バブル崩壊過程での急激な円高と、中国などの途上国からの安い製品の流入で衰退への道は加速しました。現在の津島には地場産業と呼べる産業はありません。

明治以降の風水害で忘れてはならないのは伊勢湾台風です。昭和３４年（1959）９月２６日２１時頃、愛知県に最も接近し、岐阜県西部から富山県を通り日本海へ抜けました。

この伊勢湾台風は海岸線から２０

km も離れた津島市にも、木曽川支流の鍋田川決壊、伊勢湾海岸堤防の決壊によって、木曽川の水流と伊勢湾の海水が逆上して満干を繰り返し６０日余にもわたる長期の浸水被害をもたらしたのです。海抜０ｍ地帯の水害の恐ろしさは、海部津島への人口流入を阻害しました。

昭和の市町村合併では、昭和２２年（1947）３月に津島町から津島市へと市政を施行し、愛知県では９番目の市として市制施行しました。昭和３０年（1955）１月に津島市は神守村と合併し、昭和３１年４月に永和村の旧神島田地区と合併しました。しかし、平成の合併においては他の市町村との合併はなかったです。

２ 津島の祭

津島市は祭の多い町です。初夏５月には天王川公園の藤棚で「藤まつり」が行われ、夏季７月下旬には車楽を舟に乗せて川を渡る「尾張津島天王祭」、そして秋季１０月初旬には山車（１６輌）、石採祭車（４輌）、神楽（２１基）が町なかを巡行する「津島秋まつり」が行われ、いずれも期間中は大いに賑わいます。

夏季の尾張津島天王祭と秋季の津島秋まつり、同じ地域で３ヶ月の間に２つの「神を祀る」祭礼が行われるのは、他都市には見られない大変珍しいことです。

尾張津島天王祭は津島神社（旧 津島牛頭天王社）の祭礼であり、秋の山車祭は氏神社（津島神社境外末社）の祭礼です。同じ地域で３ヶ月の間に２つの祭礼が行われているのは、神社と祭の担い手が異なっていたからです。

室町時代に創始された「尾張津島天王祭の車楽舟（だんじりぶね）行事」（国重要無形民俗文化財）は、津島神社（旧 津島牛頭天王社）の祭礼で、現在は７月第４土曜日に宵祭、翌日曜日には朝祭が行われます。

宵祭は、山型半円球状に 365 個余の提灯を飾った巻藁舟（まきわらぶね）５艘が御旅所（おたびしょ）に渡ります。

朝祭では、舟の装いを改め、美しい幕や能人形を飾った市江の車楽舟１艘を先頭に、津島の車楽舟５艘が御旅所へ向かいます。市江の車楽舟から裸の10人の鉾持（ほこもち）が川に飛び込み、御旅所へ泳いで舟より先に御旅所の神輿（みこし）に参拝します。その後、着岸した車楽舟から児（ちご）らが下船、上陸し、神輿の還御に供奉して津島神社に向かいます。宵祭と朝祭は、津島神社が主体ではなく、氏子（うじこ）の祭礼です。また、尾張津島天王祭では神職のみによる神葭流し（みよしながし）神事が朝祭の終わった深夜に行われます。これは、見物人が一切見ることのできない神事です。これは神を祀り流すという古来の「祭」といえます。

秋の山車祭（だしまつり）の創始は、市神社（いちがみしゃ）祭礼「七切祭（ななきりまつり）」です。正徳元年（1711）の神事に傘鉾（かさほこ）などを出したことに始まり、享保３年（1718）から車を飾るようになり、尾張藩から許可されて正式な祭礼となったのは、享保１１年(1726)です。

市神社「七切祭」の山車祭様式は当然ながら津島村の他の氏神社祭礼にも影響を及ぼし、土ノ御前社（つちのごぜんしゃ、現 大土社）の「今市場祭」、八剣宮祭礼（廃絶）、竈（かまど）社・居森社の「向島祭（むかえじままつり）」が始まりました。

神守（かもり）の山車祭は、宝暦５年（1755）の『尾陽村々祭礼集』に記されていますので、宝暦以前の創始です。神守の山車祭の創始年代は、津島の山車祭とほぼ同時代です。

津島市内の山車は全部で１６輌。それぞれのからくり人形の技は 300 年もの間、人から人へと伝承されてきました。絢爛豪華な山車の競演、「車切（しゃぎり）」と「人形からくり」の奉納は観る者を楽しませてくれます。

津島秋まつりは、大正１５年（1926）に津島神社が県社から国幣小社に昇格したのを奉祝して、七切祭、向島祭、今市場祭、石採祭が合同で行われるようになりました。それ以前は別々の日にそれぞれの氏神社で祭が行われていました。

江戸時代後期から、神守、神島田地区では、氏神祭に神楽（かぐら）が盛んになりました。当地方では、神楽屋形を単に神楽と称しています。

津島市が昭和３０年（1955）に神守村と合併し、翌３１年に神島田地区と合併した後は、市内全域で山車、石採祭車、神楽の祭が同日に行われるようになりました。現在、津島秋まつりは１０月第１日曜日とその前日の土曜日に行われています。

他にも、津島の民俗芸能・行事の歴史には、神楽祭・くつわ踊・鬼祭・七福神踊・伊六万歳・子供獅子・開扉祭の大松明行事などがあります。